

図書館だより

文化学園図書館

文化学園大学・文化ファッション大学院大学
文化服装学院・文化外国語専門学校

No.163

2017年1月20日発行
東京都渋谷区代々木3-22-1
TEL.03-3299-2395
FAX.03-3299-2604

もの・情報が溢れている今だからこそエコロジィを考える

文化学園大学 服装学部長 永富 彰子

エコロジィについては、自然災害の一因である地球温暖化の防止策として多企業が検討実施している。筆者もファッションにおけるエコロジィの捉え方として、サステナビリティ(持続可能)を柱とするもの作りの教育研究を行っている。米・英国において行った調査ではグリーンファッション団体や、後進国の子供達が安価な衣服生産のために低賃金で稼働を強いられ学校に行けない、などの人権問題の改善策に取り組んでいる団体の活動が見られた。一方、日本のファッション業界のエコロジィ対策はあまり表出されていないのが現状である。そこで、ファッション業界での活躍を担う人材育成を意識し、服装造形分野の授業として『何ができるのか』を模索した。結果、サステナビリティを取り上げカリキュラムの一部に廃棄布0(clothes without waste)を目標とする服作りを行った。学生から「サステナビリティは知らなかった、もの作りの中でエコを取り入れることを考えるようになった」という意見を得た。

日本のエコロジィは『もったいない』の言葉で表現され、すでに江戸時代の庶民の生活にみられる。『大人の衣服は子供の衣服に作り替えられ、その後おむつになり、焚き付けになり、その灰は野菜づくりの肥料になり、野菜を食べた人間の排泄物は

また肥料となる』という、循環型の社会生活が当たり前であった。江戸といえば中期にもエコロジィの例がみられる。筆者が育った山形県米沢市には、領地返上寸前の藩を立て直した米沢藩9代目藩主上杉鷹山ようざんがいる。上杉家は徳川家への反旗により、福島^の会津120万石から米沢30万石へと減移封された。石高減にもかかわらず全藩士が移り住んだ。当然農民の穀物の収穫だけでは財政は悪化し、15万石まで衰退をした。そこで鷹山は自ら一汁一菜などの節約をし、藩士の次男、三男には田畑の開墾や治水のための土手修理を行うべく農村に移り住ませた。さらに焼き物、木彫り彫刻、織物など産業の特産品化を奨励した。また思考・行動ができる人物を育てるため藩校(現、興譲館高校)を作り藩士・農民を問わず学ばせた。この改革により藩の財政は立ち直ることとなる。鷹山の名言として『なせば成る、成さねば為らぬ何事も、成らぬは人のなさぬなりけり』がある。考えてばかりいないで工夫と行動をせよ、成果が得られないのは努力が足りないから、と受け取れる言葉である。この精神はエコロジィにも当てはまるように思える。

*参考文献 加来耕三著『上杉鷹山危機突破の行動哲学』二見書房1993

小菅宏著『「江戸」な生き方』

文化服装学院講師(ファッション高度専門士科) 安井 涼子

歌舞伎を観ていると、タイムスリップした気分になる。歌舞伎の中でも、特に世話物(町人社会の庶民を主人公にした演目)が好きだ。演劇なので多少大げさに作られてはいるが、観ていて気持ちがいい。世話物によく「江戸っ子」が登場する。気風がよく粋で、大胆で喧嘩っ早く、せっかちで、やたらと熱い人達だ。有名人でいえば、十八代目中村勘三郎さんがぴたりとはまる。初代猿若勘三郎から十八代続く中村屋。勘三郎さんは江戸っ子の中の江戸っ子だ。人情を大切に、大胆で粋(意気)な方だった。何度観ても心にしみる。

私の知っている江戸っ子は演劇上のイメージ的なもので本質は知らない。知っていたら、もっと歌舞伎が面白くなると思い、ふと手にしたのがこの本だった。『「江戸」な生き方-粋・意地・色の町人生活』本当の江戸時代を知りたい。先人たちの生き様を知りたい。できることなら江戸っ子のように生きたい。そんな気持ちから読み始めた。「江戸」とは徳川家康により開かれた政権、江戸幕府が置かれていた場所で、政治の中心として栄えた。その城下町で生まれた文化や、生活様式、生き様が江戸っ子を生んだ。江戸っ子の三要素「意気地・見栄・張り」負け惜しみはしない、仲間を大事にする、金に執着しない、喧嘩っ早い、せっかち、無理をしてでも見栄を張る、これらを粋・意気・いなせ・伊達・通という言葉で表現していた。

歌舞伎の世界でも、江戸っ子の憧れの人物がいる。江戸のファッションリーダー的存在、助六だ。黒の羽二重の着付け、衽下駄、紫の鉢巻、蛇の目傘。現代の人が見ても惚れてしまうほどの

出で立ちだ。江戸っ子にとって黒羽二重は極上であり、基本的に衣類は地味目な色を好んだ。『四十八茶百鼠』という言葉がある。四十八の茶色に、白から黒までの百種類の鼠色。男女ともこの微妙な色合いの組み合わせを、好んで使っていた。縞や格子、江戸小紋も好まれた。見た目の華やかさよりも、微妙な色、柄の組み合わせで凝りに凝ることが江戸のファッション感覚だった。

化粧も薄化粧で素肌が勝負だった。一日に4、5回湯屋に行き、45~48℃の熱湯で肌をピカピカに磨く。火傷してしまうのではないかと心配になるが、そこは江戸っ子、我慢するそうだ。このような肌を「垢抜けた」と表現していた。この言葉で面白いのが「赤抜けた」という言葉。昔の女性の腰巻や襦袢で赤いものがTVや映画で見られるが、通な女性は赤なしでも、女として勝負してみせるといった心意気があったそうだ。今の時代にも通じるカッコいい女性だ。もう一つ、湯屋つながりで面白い言葉がある。「烏の行水」よく聞く言葉だ。黒色が大好きな江戸っ子が熱い湯船にざっと入って、さっさと出て行く様を表した言葉だそうだ。

他にも食について、住居について、吉原遊びなど、面白いことが多く書かれている。この本を読んでいて江戸の人は、言葉で遊ぶことを楽しんでいた。これも粋とされ、ひねりをくわえた会話を楽しんでいた。TVや映画、演劇など、時代物を見るときに、また違う視点から見る楽しみができたと思う。

*小菅 宏著『「江戸」な生き方』徳間書店 2008(382.136/K)

浮世絵版画「第二回内国勸業博覧會ノ圖」楊洲周延筆

文化学園大学教授(博物館実習担当) 植木 淑子



この浮世絵は明治14年(1881)に開催された第二回内国勸業博覧会を題材とし、会場を訪れた天皇と皇后、女官たちを描いている。作者は楊洲周延ようしゅうしゅうえん、明治14年3月に辻岡屋文助が刊行し、判型は大判3枚続である。

江戸時代に始まった浮世絵は、その時々の人たちが関心をもつ事象が題材とされる。江戸時代には歌舞伎や遊里、名所などが主な題材であったが、明治時代になると大きな変化が見られる。幕藩体制から天皇を中心とする体制へと変わり、西洋の文物が取り入れられたことによって、皇室、国家的な行事、政府要人の肖像画、戦争や動乱、西洋風の建築や風俗などが主流となった。元来、浮世絵は版画という手法によって同一の画面を多数刊行し、描かれた内容を人々に知らせるという役割があるが、明治時代には刻々と変わる社会情勢や大きな事件に応じ、報道という性格がさらに強くなった。「第二回内国勸業博覧會ノ圖」もこのような明

治時代の浮世絵の特色がよく表われている。

内国勸業博覧会は明治政府の殖産興業政策の一環であり、明治10年から36年までに5回が開催された。いずれの回においても各地の物産品、機械類、さらに美術・工芸品などが出品され、産業の発展に寄与した。内国勸業博覧会には必ず天皇と皇后が行幸啓し、天皇は毎回の開会式で産業奨励の勅語を下し、優秀な出品者に与えられる褒章の授与式に出御することもあった。

第二回内国勸業博覧会は、明治14年3月1日から6月30日まで東京の上野公園で開催された。内務省と大蔵省が所管し、敷地面積約43,300坪に本館5棟をはじめ美術館・機械館・農業館など6棟が建設され、出品点数は約85,000点、入場者数は820,000人余りに達した。

画面の中では中央の噴水が一際目を引き、これは第二回内国勸業博覧会の呼び物の一つであった。噴水は会場敷地内の真ん中あたりに位置し、

直径約18mの菊形の泉水の中に作られ、三人のしょうじょう猩々(中国の想像上の動物。人間に似た姿をし、酒を好む。)が背負う酒瓶から水が噴き上がる仕掛けであった。猩々は陶製で90cmほどの高さがあり、陶工として名高い宮川香山が制作した。噴水の後ろに見えるのは美術館の建物である。

この噴水と美術館を背景とし、天皇と皇后、女官たちが配されている。天皇は画面の左側に女官の中に紛れるように描かれているのに対し、皇后は右手前に天皇よりも大きく目立って描かれている。同じ場面に天皇と皇后が描かれているが、これは史実にもとづくものではない。『明治天皇紀 第五』(宮内庁編 吉川弘文館 1971)と『昭憲皇太后実録 上』(明治神宮監修 吉川弘文館 2014)によれば、天皇と皇后と一緒に第二回内国勸業博覧会を訪れることはなかった。この浮世絵は3月12日に刊行の届けが出されていることから、博覧会開始後まもなくの時期に絵師の想像によって描かれたといえることができる。

当時の人々にとって天皇や皇后の姿、皇室の動静は大きな関心事であり、これらを題材とした浮世絵が多数刊行された。絵師たちは実際の場面で天皇や皇后を目することはなく、想定される虚構の場面を描くのが通例であった。事実ということよりも題材が重要とされたのである。

こうしたことから、それぞれの人物の服装も正確に描かれてはいない。天皇は黒地に黄色や赤で華やかに装飾を施した軍服を着用し、羽根飾りのついた帽子をかぶっている。この姿は明治6年に撮影された写真に類似していることから、これに倣って描いたと考えられる。皇后は赤い袴はを穿き、着物のような衣服を羽織っている。これは宮廷独自の服装で、いわゆる十二単の略装にあたるけいこ袷袴である。着物のような衣服うちきを袷と呼び、袷は裾を引くように長く仕立てるが、屋外で着用する場合は腰の部分でたくし上げて着装する。画中の皇后の袷は裾を引いた状態であり、正確な表現とは言い難い。また皇后は髪飾りを付け、扇を開いて持っているが、袷袴姿の場合は髪飾りを付けず、扇を開いて持

つことはない。この皇后の姿も、天皇と同様に明治6年に撮影された写真に類似している。女官たちも赤い袴を穿いているが、袷ではなく着物を羽織り、腰に紐を結んでいる。これは本来の宮廷服ではなく、当時の女官がこのような姿であったかは疑問である。

それぞれの人物の服装の表現は正確ではないが、洋傘(日傘)と靴が描き込まれていることに注目したい。洋傘の1本は皇后に差し掛けられ、もう1本は左側の女官が閉じたまま持っている。靴は小さくて見にくいですが、袴の下から黒い靴のぞが覗いている。いずれも西洋から流入した服飾品であり、伝統的な宮廷服には不釣り合いのようにも感じられるが、当時は宮廷の装いとして採用されていたのである。西洋からの文物は服飾に限らず人々の興味の対象であり、浮世絵の恰好の題材とされた。この浮世絵において、絵師は洋傘を強調して描いているようにも思われる。

これまで見てきたように「第二回内国勸業博覧會ノ圖」は、会場の実景に天皇と皇后の架空の行幸啓が重ね合わされている。絵師の意図は会場の様子を伝え、同時に一般の人々には遠い存在の天皇と皇后の姿を示すことにあった。この浮世絵には虚実が取り混ぜられているとしても現代の私たちは、日本が近代化の道を歩み始めた明治10年代半ばの社会状況の一端を読み取ることができる。この後さらに近代化が進み、19年には皇后の服装は和装から洋装へ変わった。そして30年代になると、写真や印刷技術の発達によって雑誌や絵葉書が隆盛となり、皮肉にも浮世絵そのものが衰退することになるのである。

作者の楊洲周延(天保9~大正元)は、明治時代を代表する浮世絵師の一人である。士族の出身で本名を橋本直義といい、歌川国芳、三代豊国、豊原国周らに師事した。皇室、政府高官、西洋風俗を題材としたものを数多く手掛け、一方では江戸城を題材とした「千代田の大奥」「千代田おんおもての御表」などを描いている。また美人画も得意とし、題材はきわめて広範囲に及んでいる。

「日本語の教科書って誰が読む？」

文化外国語専門学校 専任教授 西村 学

皆さんが勉強している教室には必ずと言っていいほど留学生がいるはずだ。そして隣にいる留学生の流暢な日本語に感心したり、その不自然さにちょっと笑ってしまったりすることもあるだろう。このような留学生たちは日本語をどのようにして身につけているのだろうか。

日本語を学習する外国人の多くは日本語の教科書を使う。この教科書は外国人が学習するために作られたものであるため、日本語が母語である日本人はあまり目にする機会のないものである。しかし、今回はあえてこのような教科書『文化初級日本語 改訂版』（以下『文化初級』）を皆さんに紹介し、留学生への理解を少し深めていただこうと考えた。

私は学園内にある文化外国語専門学校で留学生に日本語を教えており、日々『文化初級』に接しているが、日本語の教科書と聞いて皆さんはどのようなイメージを持つだろうか。中学、高校で使った英語の教科書をイメージする人も多だろう。そう思って『文化初級』を開いてみると、大きく違う点の一つ。それは、すべて日本語で書かれているということだ。『文化初級』は日本語をゼロから学習する人のための教科書ではあるが、使われている言語は日本語だけである。日本にある日本語学校では、普通いろいろな国の学生が共に勉強しており、すべての学生に公平にと考えると日本語だけで書かざるを得ない。

そんな『文化初級』で勉強をし始めてすぐに登場する「買い物」というページには、私たちが食堂やコンビニで日々目にする「サンドイッ

チ、お弁当、ラーメン、コーヒー、水」などがイラストとともに載せられている。イラストを使うことで日本語だけでもわかるように工夫しているのだ。ラーメンのイラストや写真を見せて「ラーメン」、本物の水を見せて「水」とひとこと言えば、学生は「日本語ではそう言うのか」とわかってくれる。「買い物」のページの前には「数字」というページがあるが、「1・2・3…」という世界共通のアラビア数字だけでなく、なぜか指文字のイラストが添えられている。



実は指で数を表す方法は世界共通ではない。だから日本の指文字を紹介しているのである。今度、隣の留学生に「あなたの国では1から10を指でどう表現するの？」と尋ねて確かめてみると、その違いに驚くことだろう。このように留学生たちは単に言葉を覚えるだけではなく、母国の文化や習慣との違いを乗り越えながら日本語を身につけている。

皆さんも『文化初級』のような日本語の教科書を手にとって、どうして？とクリティカルに読み進めていくと、日本語や日本文化がどんなものなのか、今までとは違った視点で見つめ直すことができるのではないだろうか。そして、それが留学生を理解することにつながってくれば、うれしい限りである。

*文化外国語専門学校日本語科編集『文化初級日本語』2013(810.78/B/1~2)



図書館からのお知らせ

《知っていますか?》

「文化学園リポジトリ」

文化学園リポジトリでは、文化学園に属する文化学園大学、文化ファッション大学院大学、文化服装学院、文化外国語専門学校および附属研究機関等が創造した教育・研究成果や学園が所蔵する学術情報・資料を蓄積・保存し、広く学術研究に供すべくインターネットで無償公開しています。下記URLより利用できます。

<http://dspace.bunka.ac.jp/dspace/>

2016年度上半期(4月～9月)ダウンロード数上位5位の文献をご紹介します。

- 1位「皮膚表面における温冷感・湿潤感の部位差を探る」
- 2位「女性における化粧行動の目的と自意識の関連」
- 3位「ファッションへの関心と着装行動に関する基礎的調査研究」
- 4位「インド更紗・ジャワ更紗にみる模様、構成の特色について」
- 5位「上級レベルにおける読みの指導:『上級で学ぶ日本語』を使って」

春季休暇貸出期間について

以下の期間、春季休暇貸出を実施します。

在学年次生・教職員	
貸出期間	2/9(木)～3/14(火)
返却日	4/12(水)
卒業(修了)年次生	
貸出期間	2/9(木)～3/6(月)
返却日	3/6(月)

※卒業年次生の最終貸出日は3/6(月)です。その後の貸出はできませんのでご注意ください。

年度契約の教職員および臨時職員の方へ

標記の職員で、2017年度への継続が決定している方は、春季休暇貸出ができます。カウンターに申し出てください。

学内進学する学生の方へ(貸出期間について)

学内進学する学生は、進学が決定するまでは卒業年次生扱いとなります。3月上旬に進学決定後カウンターに申し出ていただくと、貸出期間・返却日が在学年次生と同じになります。

3月で卒業(修了)する学生のみなさんへ

図書館は卒業後も利用することができます。ただし、館内閲覧・コピーのみで、館外貸出はできません(閲覧・コピーも資料によっては制限があります)。

利用の際には、卒業生であることを証明する下記のいずれかを受付に提示してください。

- ①同窓会会員証(大学:紫友会、学院:すみれ会・もみじ会、BFGU:OB・OG会)
- ②卒業確認証

発行窓口は大学教務課、学院学務課、BFGU教学事務室、BIL教務部です。夜間と土曜日は、卒業確認証を発行できない窓口もありますので、事前にご確認ください。

なお、卒業生は、入館受付時間が閉館30分前までです。開館時間の短縮開館期間や利用できない日などもありますので、詳細はホームページ「卒業生用開館カレンダー」で確認するか、電話で問い合わせてください。

※未返却資料があると利用できません。

卒業までに借りている図書を返却してください。

不明な点は下記にお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください

TEL : 03-3299-2395 [URL] <http://lib.bunka.ac.jp>

twitter と facebook にて図書館の情報を発信しています

[twitter] <https://twitter.com/bunkalib> [facebook] <https://www.facebook.com/lib.bunka>